「あなたの王が来る」
ゼカリヤ書 9 章 9-10 節

この箇所は昔から、イエスさまの「エルサレム入城」の場面と呼ばれてきました。イエスさまが公生涯を生きられた 2000 年も、ユダヤの人々はローマに支配されていました。このことは人々にとって、つらく、悲しく、そして何よりも屈辱以外の何物でもありませんでした。ですから、人々は「あなたの王が来る」と聖書に書かれていることを切に祈り、期待し、信じていたのです。

ユダヤの人々は、祭司や律法学者たちのようではなく、権威ある者として教えを説くイエスさまこそ、自分たちの待ち焦がれていたその王様、ローマ帝国を打ち破り、その支配から解放してくれる救い主だと思いました。そして、イエスさまがエルサレムに入城されるとき、自分の上着や、しゅろの葉をじゅうたんのように道に敷いて、「王様、万歳！救い主、万歳！」と叫んでお迎えしようとしたのです。

ところが、向こうからやって来られたイエスさまは、どんなお姿だったでしょうか？王様や兵隊が乗る馬ではなく、なんと子ろばに乗ってやって来られたのです。

どうして、ろばだったのでしょう。第一に、このろばの背の低さこそが大事なことでした。それは上から私たちを見下ろすのではなく、私たちと同じ目線に立って、私たちの友となってくださる王様であること、力ではなく、愛によって私たちを治めてくださる御方であるということです。第二に、ろばの足の遅さも大事なことでした。ろばに乗った王様は、歩みの遅い者、子供や老人やハンディキャップを背負った人、そういう力の弱い者と歩みを合わせて歩んでくださる王なのです。

それに対して、ユダヤの人々がイエスさまに期待していたのは、政治的・軍事的な力と物質的豊かさでした。世界の中心を再びこのユダヤのエルサレムに呼び込んでほしい。それによる豊かさ・裕福さを今こそ実現させて欲しい。そのような王、そのような政治的・軍事的ヒーローを求めて「ホサナ、万歳」というのが、彼らの願望でした。そして、この望みがもろくも崩れ去った時、手のひらを返したように「十字架につけろ」と叫ぶのです。

しかし、イエス・キリストはろばに乗った王様です。力の王ではなく、愛の王です。戦いの王ではなく、平和の王です。馬に乗ってユダヤの完全独立をもたらす勝利者ではなく、荷を負うろばのように、人の重荷を負って勝利されるお方です。

では、イエスさまは、何に勝利してくださるのでしょうか。それは死に打ち勝つ勝利です。人間にとって最も大きい重荷は何でしょうか。それは人の心の中に巣くう罪です。この罪のゆえに、人は神なき望みなき者となってしまっています。この罪のゆえに、人は愛なく満足のない者となってしまっています。

それをこの王様は、自分の体もろとも、人の罪と人の死を十字架に張り付けにして滅ぼされるのです。戦争がないどころの平和ではありません。死を滅ぼすという平和を、命の王として成し遂げてくださる。その時、命の源であられる神様との間に完全な平和を築くことが出来る。また、そのことによって人と人との間にも平和がもたらされる。そのためにイエス・キリストは来られたのです。

この王は、「高ぶる」ことのない王だと告げられています。これは謙遜な方、へりくだった方という意味です。それは、ただ単に偉そうにしない方だという程度のことを告げているのではありません。イエスさまは父なる神様と共に天におられましたが、人間となり、馬小屋に生まれ、罪人の一人に数えられて十字架にお架かりになる。この歩みが「へりくだった方」ということです。

アドベントのこの時、私たちは、このイエス・キリストの姿をしっかりと見つめる者でありたいと思います。軍馬ではなく子ろばに乗った王の御心を心に刻む者でありたいと思います。主が望まれるのは、戦争でも侵略でも殲滅でもありません。イエス・キリストは、柔和と平和の王として来られたのです。ご自分の命を捨てるほどに私たちを愛し、この世を愛し、その十字架によって私たちを罪から解放し、永遠の死から救い出してくださったのです。私たちは、この王を希望として、世界の平和を祈ってまいりたいと願います。